



日本の心の歌を作った 偉大なる国文学者

高野辰之

高野辰之は、明治9年4月13日、下水内郡永江村（現在市内大字永江）に生まれた。厳しさの中にも愛に満ちた家庭環境と豊かな自然環境の中で育ったことが、後の名曲の作詞につながる。

14歳で下水内高等小学校を卒業し、母校の永田尋常小学校の代用教員を勤める。その後、長野県尋常師範学校（現在は信州大学へ統合）へ進学し、卒業後の上田萬年博士との出会いにより、本格的な

文学研究を始める。博士の下で国語・国文学を研究し、やがて「文部省国語教科書編纂委員」に選ばれる。国が初めて発行した国定音楽教科書「尋常小学唱歌」を編纂する中で、唱歌や全国各地の校歌を作詞することとなる。

唱歌の作詞は職務として始めたものであったが、同じ編纂委員で鳥取県鳥取市出身の作曲家、岡野貞一とのコンビにより作られた「故郷」、「朧月夜」などの唱歌は、文部科学省が定める現在の小学校共通教材24曲のうち、6曲までを占めている。

日本に住む誰もが大人に成長していく過程に、必ず高野辰之の歌がある。聞く人の心に故郷への想いと親しみを感じさせる高野辰之の歌は、まさに日本の心の歌といえる。



いつまでも日本人の心の故郷であってほしい

高野辰之の生家

高野良之さん

辰之が亡くなった当時、私は4歳であったため、本人との思い出はほとんど記憶にありませんが、100年たった今も、「故郷」「朧月夜」が歌われ続けていることはすごいことだと思えます。

辰之のことは、「何事にも勉強家であり、文学以外にも建築・経済など雑学に詳しい人だった」と聞いています。自分で勉強して学者になり、作詞家として歴史に残る名曲も作った辰之は、一言で言

えば「偉い人」だったと思います。

また、故郷の2番の歌詞に「いかにいます父母（どうしていますか、お父さんお母さん）」と歌っていることから、辰之が一番大切に思っていたのは、両親のことであつたと思います。辰之の歌を聞けば、誰もが故郷の情景を思い出すのは、そういった原点を大切に

する部分に、皆さんが共感しているからだと思えます。全国各地で未だに故郷、朧月夜が歌われていますが、辰之の感性を作り上げたのはこの地域の自然・風土であり、辰之の原点がここにあつたことを皆さんにも忘れないでいただきたいです。

離れていても「歌で故郷を思い出せる辰之の歌」が、いつまでも日本人の心の故郷であつてもらいたいです。

現代歌謡の礎を築いた 東洋のフォスター

中山晋平

中山晋平は、明治20年3月22日、下高井郡新野村（現在市内大字新野）に生まれた。音楽に憧れを抱いたのは13歳の春、赤十字の地方大会に来ていた楽隊の音楽を聴いたことがきっかけであった。

が書生を求めていることを知り、上京を決意し島村家の書生となる。長野市出身の松井須磨子らと島村抱月が旗上げした「芸術座」は、第3回公演の中で「劇中歌の挿入」を試みようとした。抱月は作曲を誰に頼んだらよいか新潟県糸魚川市出身の詩人、相馬御風に相談すると、中山晋平を推薦する。

こうして、島村抱月・相馬御風作詞、中山晋平作曲の「カチューシャの唄」が完成する。劇中で松井須磨子が歌うと、芝居とともに歌も空前の大ヒットとなった。

中山晋平はこの後も、「ゴンドラの唄」など劇中歌だけでなく、日本古来のリズム・方言・イントネーションを大切にして作曲を行い、「砂山」、「シャボン玉」、「中野小唄」など童謡や地方民謡を発祥し、現代歌謡の礎を築いた。

100年後も今と変わらず 歌い継がれてほしい

中山晋平生家

中山治さん

華々しい活躍をしていた「芸術座」の劇中歌、カチューシャの唄を作曲したことで、晋平の作曲家人生がスタートしました。

島村抱月に「大衆のための唄を作れ」と言われたことが、後の作曲にもつながり、未だに歌い継がれる名曲の数々を作曲できた要因となっているのだと思います。

晋平の父 実之助は和歌などを自ら学んでおり、母 そうは、江部の山田家の分家として生まれ、

教育係だった岩井貞子から女子教育として歌や学問を学んでいます。「中野市から偉大な作曲家がよく生まれたものだ」と話されている声を聞いたことがありますが、これは偶然ではなく、両親からしっかり受け継がれた部分もあるのだと思います。

また、晋平は良い作詞家に出会えたことが幸せでした。芸術座が解散した後も、節目節目で良き人に出会えたことが晋平の大成につながったのだと思います。

今は、昔ほど童謡を歌う機会が無くなっているため、今後もしっかり子どもたちにも教えていくことが大切です。日本人が日本人である限り「残っていく歌」が必ずあるので、晋平の優しい歌が、100年後も今と変わらず歌い継がれていってほしいです。

